

中学校英語授業における実習生の実態と課題
- 実習生の学習指導案と意識調査をもとに -

A Study of the English Classes by Student Teachers at
Junior High Schools
- Based on an Analysis of Teaching Plans and Questionnaires -

土 持 かおり
TSUCHIMOCHI Kaori

中学校における実習生英語授業の実態と課題 －実習生の学習指導案と意識調査をもとに－

A Study of the English Classes by Student Teachers at Junior High Schools

－ Based on an Analysis of Teaching Plans and Questionnaires －

土 持 かおり

TSUCHIMOCHI Kaori

キーワード：指導案、教育実習、意識調査、模擬授業、コミュニケーション能力

1. はじめに

平成 24 年度より中学校学習指導要領の改訂が行われ、3 学年とも 1 時間増え、授業時数が週 3 時間から週 4 時間へと変わった。他教科と比べてもっとも多い授業時間数の増加である。それに対して教える内容としては語彙数が 900 語程度から 1200 語程度に増加した以外、大きく量的に増えていることはない。このことは、3 年間を通じて、重要事項を繰り返し指導することによって定着を図るという外国語習得特有の性質に配慮してのものであるコミュニケーション能力の育成には、基礎的な言語材料についての理解や定着のための練習が欠かせないことが重要である。また、文法事項の取り扱いについては、用語や用法の区別などの指導が中心とならないように配慮し、「実際に活用できるように指導すること」とより具体的に示されている。現場教育では基礎を重視するあまり文法理解のために 1 つの表現を暗記してそれを使用することだけに終始しがちであるが、生徒自身が具体的な場面や状況に合わせて自らふさわしい表現を選んで使用することができるような配慮が授業に置いて大切ということである。

このような状況の中、英語が実際の学校現場でどのように指導・展開されているのかを知ることが教育実習に臨む学生を指導する上で大変参考になるものである。その重要手段となるのが、学習指導案（以下「指導案」と略称する）である。指導案は授業の到達目標を設定し、その目標に至るまでの過程を具体化・明確化した計画であり、教育実習で学生が授業を行う準備段階として学んでおくべき様々な内容が含まれている。教育実習生が現場で英語授業をどのように指導・展開しているかを調査し、課題について考察を行うためには、実習生の指導案を分析することが有益であると考えられる。教育実習生は事前に本学で、英語科教育法の理論、指導案作成・授業構成・指導技術など実際の授業運営に必要な知識や演習を学んでいる。中学校で実習を行う際には、指導教員やその他の教員の授業観察や、指導教員の助言のもと実習生自身の指導案を作成するのが一般的である。実習生の指導案は実際の現場で教えている英語教師の授業を反映していないという指摘もあるかもしれないが、経験を積んだ実際の英語教師が指導案を作成するのは研究授業や公開授業の場合であることが想定され、通常の授業を反映し

ていない可能性もある。それゆえ、実習生の指導案はより一般的でかつ有効と思われる指導内容・方法および流れになっている可能性が高い（森泉、2006）。また、指導教員の助言等を受けて作成した指導案であっても、熟練した英語教師の授業展開通りでないことは想定されうる。そこで、本稿では本学の実習生が評価授業で使用した指導案を分析することで、実習生による英語授業の現状と問題点を考察していくこととする。また、実習後に学生に実施した意識調査の結果を基に、教科教育における課題等について考察を行う。具体的には、本研究では本学の 12 名の教育実習生の実習後に提出した指導案（評価授業で使用したもの）および実習に関する意識調査の qualitative な分析を行う。これらの分析および調査結果を基に実習生の英語授業の実態と課題を探るとともに、本学での教科教育等授業の改善の視点を模索することが目的である。

2. 実習生の指導案の分析

2.1 調査資料

平成 25 年 5 月～6 月の教育実習期間中に行われた評価授業の指導案を分析対象とした。分析対象は本学英語英文学専攻 2 年生の合計 12 の指導案である。担当学年の違いについては本稿の目的でないため、これらの違いについては検討を行わない。

2.2 調査項目の結果と考察

(1) 指導教材と指導目標

実習生が指導案を使用した授業がどのような題材を取り扱っているかについては、教科書を使用していない授業はなく、全て教科書の題材を使用している。教科書の形式に基づき以下のように分類を行った。(a)単元のトピックに関連した対話形式になっているもの、(b)典型的な会話場面になっているもの、(c)文章形式になっているもの、(d)特定形式の文章（アンケート、イベント案内、手紙など）、という 4 つのカテゴリーに分類することができた。指導目標については、指導案に書かれていた本時の指導目標から分類すると、①話すこと・内容理解・文法事項理解、②話すこと・内容理解、③話すこと・文法事項理解、④話すこと・文法事項理解・書くこと、⑤内容理解・文法事項理解、⑥内容理解・書くこと、⑦内容理解・読むこと、の 7 つに分類することができた。指導題材と指導目標については表 1 に示す。

指導目標について最も多いのは、話すこと・本文の内容理解・文法事項の 3 つの側面を目標としたもので 5 件であった。これらの指導案は、教科書の本時の教材（本文）に出てくる基本本文や文法事項を理解するだけでなく、実際にコミュニケーション活動で使用することを目標としていると考えられ、文法事項を実際に活用できるように指導することという学習指導要領を踏まえていることが伺える。

表 1 指導教材と指導目標

	対話	会話	文章	特定文章	合計
話す・理解・文法	1	2		2	5
話す・理解	1				1
話す・文法			1		1
話す・文法・書く		1			1
理解・文法			1	1	2
理解・書く				1	1
理解・読む				1	1
合計	2	3	2	5	12

(2) 教科書題材の展開法

指導案における授業の展開について、ほとんどが「導入」、「展開」、「まとめ」の形になっているが、多くの指導案の「導入」部は英語でのあいさつや前回の復習になっているため、「展開」と「まとめ」にあたる部分を分析対象とした。

まず、題材の導入については、一番多かったのは新出表現や文法事項を含む「基本文の説明・確認」であり 5 件あった。次に「新出単語の理解と発音」が 3 件であり、本文のリスニングから導入を行っているものが 2 件あった。三浦他（1999）でも指摘されているが、中学生という発達段階を考えると、英語インプット量の点からも、もっと音声を重視した導入が必要であり、いきなり新出事項の板書をする前に音声のみの導入段階を入れるべきであろう。音声を重視した導入とは、教師と生徒のinteractionを通した導入であり、題材に関連した身近な話題や既出事項を用いた平易な英語でのやりとりから徐々にターゲットに近づく工夫をするなどが必要であろう。

次に本文をどのような手順で展開していくかについては、12 の指導案の展開法は様々であり、下記に示す通りである。

- ・ 本文概要把握→本文の意味確認→内容理解のQ&A→音読→ペアワーク
- ・ 本文の概要把握→音読→本文の意味確認→内容理解のQ&A
- ・ 本文の概要把握→内容理解のQ&A→音読→グループワーク
- ・ 本文の概要把握→リスニング→内容理解のQ&A→音読→ペアワーク
- ・ 本文リスニング→内容理解のQ&A→本文の意味確認→音読→ペアワーク
- ・ 本文リスニング→本文の訳→音読→パターンプラクティス→ワークシート
- ・ 本文リスニング→本文の意味確認→音読→ペアワーク
- ・ 本文リスニング&文の並べ替え→音読→本文の訳→音読→文作成ゲーム
- ・ 本文リスニング→音読→本文の意味確認→ペアワーク

・本文の訳→音読→ワークシート

本文の訳を一文ずつ行う従来の訳読式を使用しているのは3件のみであり、その訳読方式に替わるやり方として、本文の概要把握と内容理解のQ&Aの組み合わせを取っている指導案が5件あった。また、本文の意味確認の前にリスニングから初めている指導案も多かったが、聞かせる前に内容把握を助ける知識や情報を与えるなどしているのは1件しかなかった。伊藤(2012)が指摘しているように、全体から部分を推測しながらトップダウン処理で生徒が英語を聞き取れるような工夫も必要であろう。本件の指導案では本文の概要把握のために教師が本文の内容を平易な英語でわかり易く説明するオーラル・イントロダクションを使用したものはなかったが、特に文章形式の題材の場合、文字で確認させる前に音声での導入が望ましいのではないだろうか。また、ほとんどすべての指導案は学習の目標とする文法事項や表現の定着を図るため最後に、ペアワーク・グループワークなど学習者同士の活動やワークシート、ゲームなどの活動を取り入れている。

(3) 音読について

全ての指導案が音読を取り入れているが、そのやり方は様々であった。一番多いのは教師やCDの後について読むChoral reading（一斉）で8件あり、そのうち他の音読法と組み合わせているものが5件であった。Choral readingと組み合わされているものには、Read and look up、intake reading、pair reading（3件）がある。また、スラッシュリーディングで意味を塊で掴むヒントを与え、意味確認の後、再度pair readingをさせるという効果的な音読を導入している指導案が1件あった。個人での音読のみを取り入れているのが2件あったが、教師やCD音声といったモデル音声なしに個人での音読だけの効果には大きな疑問が持たれる。一斉音読のみ、個人音読のみといった音読は、音読を単なる言語活動の一つとして明確な目的もなく行っている可能性も考えられる。鈴木・門田（2012）が、教師のあとについて1、2度読ませただけで、バズ・リーディングやペアによる音読練習が行われている授業が増えているが、単語の発音、強勢の位置、ポーズの位置など全くでたらめである場合が非常に多いと指摘していることから、効果的な音読法の導入だけでなく、英語らしい正しい読み方の繰り返し練習を行い定着を図ることも重要であろう。

また、本文の意味確認の前に音読を行っているものが3件あったが、意味の理解の前に音読を行うことについては明確な目的もなく行っていると感じられる。伊藤（2012）は、意味を考えながら音読をするような指導を工夫し、音と意味の結びつきを意識しながら読む態度の必要性を述べている。また、三浦他（1999）が述べているように、中学校1年生程度であれば、本文の音読の前に十分なインプットを与え、十分な練習をして、そして本文を数回音読すれば大意が把握できるくらいにし、中学校2～3年では、意味を理解した上での全体・個人の音読をもっと大切にすべきであろう。

(4) 生徒の言語活動

本時の学習内容の定着を図るために、ほとんどの指導案が、授業の終盤に学習した表現や基本文を使った言語活動を取り入れており、ペアやグループなど他者とのコミュニケーションを取り入れた指導案は9件あった。教科書題材、言語活動と関連のある学習目標および言語活動を表2にまとめた。

表2 学習目標と言語活動の関連

教科書題材	学習目標	言語活動
アンケート（質問&回答）	現在完了形を使って質問したり答えられる	ペアワーク（ワークシートでインタビュー）
アンケート（質問&回答）	現在完了形を使って質問したり答えられる	ペアワーク（ワークシートでインタビュー）&発表
会話場面（誘う、提案する）	相手を予定に誘うことができる	ペアワーク（ワークシートで文を作成し対話）
会話場面（許可、依頼）	依頼文を使って会話することができる	グループワーク（文を作成し対話）&発表
対話形式	身近な人を紹介することができる	ペアワーク（文を作成し対話）&発表
手紙文	5文程度の手紙文を書ける	ペアワーク（手紙を作成し互いに音読）&発表
文章形式	現在完了形を理解することができる	ラインゲーム（英文を作成し音読）
文章形式	不定詞を使って会話することができる	グループワーク（文を作成し対話）&発表
対話形式	What do you ~?の文と応答の形を表現できる	ペアワーク（インタビュー）

学習目標となっている表現や基本文、文法事項については、理解や機械的なドリルで終わらせるだけでなく、実際的使用に近い場面で、意味のある言語使用の機会を設定することが大切であり、その中でターゲットとなる英文が集中的に使われるような活動をさせることが重要である（米山他、2007）。このことは特に実践的コミュニケーション能力を育成するためにも大切である。学習目標に「話すこと」を入れている指導案は8件あったが、7件がペアやグループワークで学習した表現や基本文を使ったコミュニケーション活動を取り入れており、1件のみが残念ながら個人での文の作成に終わっている。さらに、ペア・グループワークでの活動だけでなく全体への発表という形にまで展開している指導案は5件あった。

本指導案ではワークシートを使用している活動が多いが、対話文やインタビューもペアやグループワークで漠然と練習させるだけでなく、ワークシートを用い補助を与えることで、英語

が苦手な学習者にとって英語学習を進めようとする動機づけにもなるであろう。さらに、自分の作成した文だけでなく、相手の回答も英文で書きとらせる指示をしておけば、シートを回収し、添削をすることもでき、さらに定着度を高めることもできるが、本稿の指導案でシートの回収と添削まで指導案に入れていたものは 2 件のみであった。さらに、ペアワークやグループワークは学習者に楽しい雰囲気を与え学習意欲の向上にもつながることから導入される場合も多いが、正確性や定着度を高めるためには、これらの学習活動前に目標となる表現や文法事項の十分な説明と個人での口頭練習も必要であろう。しかしながら、実際、口頭練習について繰り返しているかどうかまでは指導案からだけでは判断できかねない。

3. 実習後のアンケート調査結果と考察

本件の指導案を提出した学生 12 名に、実習終了後、教科指導に関する本学での授業内容及び教育実習に関する意識調査をアンケート形式で実施した。内容としては、1) 実習までに特に重点的に準備しておいた方がよいと思われる項目、2) 実習に行く前の模擬授業で特に重要だったと思われる点、3) 指導案の作成について現場で感じたこと、4) 本学の英語科教育の授業で特に有益だった内容、今後取り入れて欲しい内容の 4 点についてである。1) は多肢選択方式で、それ以外の項目については自由記述方式であり、学生からは授業体験を通した様々な感想や反省点が寄せられ、それらについて検証する。

まず、1) 実習までに特に準備しておいた方がよいと思われる項目についてであるが、7 項目から 3 つ選択する方法を取り、結果は表 3 の通りである。

表 3 実習までに特に準備しておいた方がいい項目

	教科書を使用した教材研究	英語力をつける	教授法の知識を学ぶ	指導技術の修得	学習指導要領を読む	模擬授業の練習	教科書を使用した指導案の書き方
回答数	8	7	5	2	1	9	4

実習の経験を踏まえ、多くの学生がもっと準備しておいた方がよかったと思う項目は、模擬授業の練習と教材研究であった。3 番目に多かった英語力については、発音 (4 名)、語彙力 (1 名)、クラスルーム・イングリッシュ (1 名)、スペリング (1 名) が具体例として挙げられている。指導案の書き方について選択した学生は少なく、これらの項目の中では、模擬授業の練習や教材研究の方がより授業実践に役立つと感じたのであろう。しかしながら、別の質問項目においては指導案の書き方についての要望は多い。

次に、2) 実習前の模擬授業で特に重要だったと思われる点についてであるが、授業の構成・展開の仕方、時間配分を考え模擬授業をすること、模擬授業への生徒役の友人の感想、先生の

意見・助言、50分の授業の指導案を作ること、などが挙げられている。

3) 指導案作成について実習現場で感じたことについては、略案の作り方は学んでいたが細案の作り方を練習していることが必要だと感じた、学校や指導教員の書き方に従うのが一番だと思った（大学では簡潔に書く様式だったので）、評価授業以外は略案で良かったが評価授業は細案だったので大変だったなど、授業細案の作成の難しさ・大変さを挙げていた者が最も多かった。また、何度も指導案を訂正することで実習授業の流れも把握でき授業でのポイントを意識することができ指導案の大切さを感じたという記述もあり、指導案を何度も作成していくことにより授業構成、授業展開のコツを学んでいったことが伺える。

続いて、4) 本学の授業（「英語科教育法」、「教育実習事前・事後指導」）で特に有益だった内容、今後取り入れて欲しい内容に関してであるが、まず有益であった内容については、最も多かったのが模擬授業と指導案の書き方であった。学生にとっては、英語教育理論や教授法などよりも現場での授業実践にすぐに生かすことのできる内容が有益と感じられたのであろう。次に公開授業のDVDを見ていたことが良かったという記述が多かった。このDVDは全国の中学校の公開授業や研究授業を映像化した市販品であるが、これを視聴させることにより、本学生は実際の授業の様子の雰囲気や指導法を参考にすることができ、とても役立つと感じたようである。一方、今後取り入れて欲しい内容としては、最も多かったのが、模擬授業の回数をもっと増やして欲しい、模擬授業を一人で50分する時間を設けて欲しいという内容であった。これは授業時間の制約のため、1つの単元をグループで分担して模擬授業をさせる方式を取っているためであろう。次に多かったのが、細案の書き方、細案の例、提出した指導案への良い点・改善点のアドバイスなど、指導案に関する要望であった。次にクラスルーム・イングリッシュの練習、クラスルーム・イングリッシュを踏まえた上での模擬授業の練習といった授業での教室英語に関しての要望であった。授業の最初と最後の挨拶だけが英語、後は指示、質問、ほめ言葉などはほとんど日本語では英語の授業の雰囲気がなくなってしまう。12の指導案からも教師の英語使用は少ないことが強く感じられた。英語の教室であるためには極力「教室英語」を使うことは重要であり、現場でそれを実感した学生も少なからずいたようである。

4. 大学における指導上の留意点

以上、本学実習生の指導案と実習後に実施したアンケート調査の分析結果を述べてきたが、これらを踏まえて、本学における教科教育関連の授業における留意点、課題について次に考察する。

まずは、指導案の作成についてである。教育実習で教壇に立つ実習生の場合、1時間単位で授業を担当することが多い。その中で何を目標にして、どのように授業を展開し、そしてどのような学習活動を盛り込んでいくかなどを担当教員の指導のもとに計画していくことになる。授業には、導入・発展・定着という大きな流れがあり、十分な教材研究と周到な授業準備が最低限必要であり、それが計画の成否につながるといえる。まず、指導案作成と模擬授業に先立っ

て、教材分析に取り組むことが必要であろう。学生のアンケート調査でも教科書を使用した教材研究が実習準備として重要であると認識している。教材分析→指導案作成→具体的言語活動の紹介→指導案の見直しといった手順を今後の授業展開に取り入れることが必要であろう。また、指導案分析から、実習生の指導案は指導教員のもとに作成されたとは言え、十分でないものも多いことが伺える。指導案は授業シナリオ・設計図のようなものであり、特に実習生のように授業手順に不慣れな場合、指導案の作成過程で、自分が行う授業に対するイメージトレーニングを行うこともできるであろう。そのような視点からも略案だけでなく細案の書き方の練習を積み重ねておくことも必要であり、学生アンケートにも要望が多く見られている。何度も「案」を練り上げて細案を作成していく過程で教材研究もより深いものとなり、学習目標に沿った授業展開のイメージも掴んでいくことができるであろう。過去の実習生の指導案や書籍からのサンプルなど参考となるものを提示すると学生にもわかり易いであろう。指導案の形式は様々であり、参考して提示した指導案が仮に実習先のそれとは異なっているとしても、多様な形式や内容を知っておくことは実習に出てから必ず役に立つであろう。

次に、授業における英語使用の不足である。指導案の分析ではオーラル・イントロダクションや英語による内容理解についてのQ&Aを取り入れているものは1件もなく、また学生アンケートではクラスルーム・イングリッシュの練習不足についての記述が少なからず見られた。新学習指導要領では、小学校の英語教育との連携を唱えており、小学校の英語活動では音声面を中心とした英語でのコミュニケーションをする態度の養成が軸となっているが、その流れを中学校で止めてはならないということである（飯野、2011）。これはコミュニケーション活動だけでなく、英語授業での教員の英語使用をできるだけ取り入れることで生徒との英語でのインタラクションも増やすということも指していると考えられる。恩藤・藤森（1983）は、ベテラン教師の発話と比較すると、教育実習生は、英語使用場面、生徒－教師間の英語でのやりとりの場面が少ないことを明らかにしている。本件で分析した指導案においてもウォーム・アップで日付、天候についてのやりとりで英語を使用しているものは多かったが、教材導入・展開の場面においてオーラル・イントロダクションや英語での内容理解についてのQ&Aは1件も見られなかった。今日の英語教育での重点目標はコミュニケーションで、指導する教員には高度は言語運用能力が要求されている。つまり、教員は教室で「英語を話す」ことが要求されている。教師の話す英語は生徒にとっても貴重なインプットでもある。これからはコミュニケーションを主体とした授業が行えるスキル・能力を持つ学生を育てることが必要である。

最後に、指導案の作成練習と並んで大切なのが模擬授業の練習であり、学生アンケート結果からも、その重要性を認識するとともに実習前に集中的にやっておきたいという要望が高い。学生は一人で50分の授業をフルに練習することを希望しているが、開講時数の関係で学生一人一人に模擬授業を実施させるのは不可能であり、50分授業をセクションに分け一人ずつ担当する分担方式を取っている。しかし、この方式では全員の模擬授業体験は可能であるものの、授業全体の流れが掴みにくく、セクション毎の連携・関連が不十分なまま終わる場合も多い。そ

ここで、少なくとも1回は書き上げた指導案によるシミュレーションが必要であろう。課外時間等を利用しクラスメートを生徒対象とし、自分で作成した指導案を基に50分の授業を一人で担当させ導入・展開・終末と授業全体の流れを把握させること、実際に言語活動を生徒にやらせること、そして自分で書いた指示や説明にどの程度時間を要するのかを経験させることなども大きな課題であろう。そして模擬授業による、このような経験を積ませる努力を行い、さらに指導案を手直ししていくことで、結果的によりよい指導案作りへと学生を導くことになるであろう。また、学生が生徒役になることで授業を受ける側になって気づく点が自らの授業改善のための有益な指針にもなりうるであろう。

5. 結語

今回は本学の教育実習生12名についての限られた調査でしかなく、一般化することはできないが、実習生の現場での指導案と意識調査から本学における教育実習準備には大きな示唆を与えると考えられる点が多く得られたと言えよう。学習指導案は、本時の学習目標をより具体化するためのシナリオという役目を担っており、その目標を達成するためのふさわしい展開や言語活動を取り入れるべきである。しかしながら、実習生の指導案を分析するとこの点において不十分なものも見られた。教科教育においてはMethodだけではなく、そのMethodの中に含まれるActivitiesやTechniquesをその目的を理解させた上で、各自の授業目標を達成するためにはこうした要素をいかに組み合わせればいいのかを考察させていくことも、よりよい指導案を構築させていく手助けとなるであろう。そして、教授法・指導法を学ぶとともに、学生自身が自己の教授活動の練習を通じ特性を知り、その過程や結果について改善を図ってゆく視点を養成することが大学における教科教育の責務であろう。

参考文献

- 飯野厚・金澤洋子・富永裕子・中鉢恵一・中村隆（2011）『グローバル時代の英語科教育－新しい英語科教育法』成美堂
- 伊藤豊美（2012）『実践・英語科指導法演習』大阪教育図書
- 北山長貴（1999）「英語科教育法と教育実習に関わる問題」－教育実習を通じて学生は何を教え何を学んだのか』『比較文化』4、241－261.
- 小林多佳子（1998）「英語科教育法の授業改善の視点－教育実習記録と意識調査をもとに－」『学苑』4、21－29.
- 鈴木寿一・門田修平（2012）『英語音読指導ハンドブック』大修館書店
- 二牟礼勉（1981）「英語科教育法改善のための考察－教育実習をめぐる諸問題・学生の意識調査」『聖霊女子短期大学紀要』9、19－30.
- 三浦省五・松浦伸和・赤松猛・伊賀泰恵・石原義文・大隈教臣・五井千穂・笹原豊造・壇泉・

原田良三・三宅重徳 (1999) 「これからの英語科教員養成の課題 (2) - 教育実習生による中学校の授業に焦点をあてて -」『広島大学教育学部・関係附属学校園共同研究体制研究紀要』27、53 - 60.

三木徹 (2005) 「指導案作成と模擬授業を通した英語科教員養成のプログラム」『大谷女子大学英語英文学研究』32、43 - 67.

森泉哲・浅野亭三 (2006) 「中学校英語科授業の実態と課題 - 教育実習生の学習指導案からの分析 -」『南山大学紀要』34、59 - 74.

米山朝二・杉山敏・多田茂 (2007) 『英語科教育実習ハンドブック』大修館書店